

『方便から真実へ 浄土真宗』より抜粋

239 方便ほうべんと真実しんじつとは、何によって、どこで区別くべつするのですか。

解説かいせつⅡ方便ほうべんとは、凡夫ぼんぶの根機こんきに応おうじて説法せっぽうされたもので、方法便宜ほうほうべんぎの説法せっぽう、平等一味びやうどういちみの世界せかいに誘導ゆうどうせんがための、調機誘引ちようきゆういんのための説法せっぽうであります。真実しんじつとは、如来にょらいの真意しんいを顕あらわす説法せっぽうであります。聖人しょうにんは真仏土卷しんぶつどかんに、「真仮しんけを知らざるによりて如来広大にょらいこうだいの恩徳おんどくを迷失めいしつする」といわれ。「歎異鈔たんにしやう」には、おほよそ聖教しょうぎやうには、真実権仮しんじつごんけともにあひまじはり候そうろふなり、権ごんをすてて実じつをとり、仮けをさしおきて真しんをもちいるこそ聖人しょうにんの御本意ごほんいにて候そうらへ」とあり、「愚禿鈔ぐとくしやう」には、「ひそかに観經かんぎやうの三心往生さんしんおうじやうを案ずれば、これすなはち諸機自力各別しよきじりきかくべつの三心さんしんなり、大經だいぎやうの三信さんしんに歸きせしめんがためなり、諸機しよきを勧誘かんゆうして三信さんしんに通入つうにゆうせしめんと欲おもふなり、御本典ごほんでんでも聞損もんそんの機きが第十九願だいがん、第二十願だいがんの機きだから誘導ゆうどうして第十八願だいがんに通入つうにゆうせんがためであり、三經往生文類さんきやうおうじやうもんるいがそのとおりであり、和讃わさんが、

念仏成仏ねんぶつじょうぶつこれ真宗しんしゅう

万行諸善まんぎょうしよぜんこれ仮門けもん

權実真仮ごんじつしんけをわかずして 自然じねんの淨土じょうどをえぞしらぬ

聖道權仮しょうどうごんけの方便ほうべんに 衆生しゅじょうひさしくとどまりて

諸有しゅうに流轉るてんの身みとぞなる 悲願ひがんの一乗いちじょう歸命きみんせよ

大聖だいしょうおのおのもろともに 凡愚ぼんぐ底下ていげのつみびとを

逆惡ぎやくあくもらさぬ誓願せいがんに 方便ほうべん引入いんにゅうせしめけり

方便ほうべんとは、真実しんじつに通入つうにゅうせしめんがための方便ほうべんであつて、この意味いみを知らずしに第十八願だいじゅうはちがんの真似まねをしていても、それは贗物にせものであつて、鍍金めっきであつて、臨終りんじゅうにはみな剥はげるのであります。

方便とは、感情が法に調子を合わせていることであり、真実とは、実機が名号と一体になつたことであります。

方便とは、機を包んで法の尊高を眺めている桁であり、真実とは、照らしだされた逆謗の機が摂取された大自覚を得た桁であります。

方便とは、いつとはなしにいただいたつもりの桁であり、真実とは、地獄一定が極楽一定に飛び上がって喜ぶ桁であります。

方便とは、信前も信後もわからず、ただ素直に喜んでいる桁であり、真実とは、願力の不思議に貫かれ、若不生者に生かされた桁であります

方便とは、若存若亡の桁であり、真実とは、決定往生の桁であります。

方便とは、方便を方便と知らない桁であり、真実とは真仮の分際を鮮やかに諦得さしていた

だいた桁けたであります。

方便ほうべんとは、成就じょうじゆ文ぶんを讀よんで理解りかいし、なるほどと承知しょうちした桁けたであり、眞実しんじつとは、開発かいほつして成就じょうじゆ文もんが自分じぶんのものになった人ひとであります。

釈尊しゃくそんの出世本懷しゆつせほんがいが自分じぶんの出世本懷しゆつせほんがいになった人ひとでなければ、撰取せんしゆされてはいません。後生ごしやうが氣きにかからぬ人、苦くにならない人ひとは、後生ごしやうが一大事いちだいじになっていない人ひとです。嘖ふき出る煩惱ぼんのうに驚おどろいた私わたしは、死しんでお助けたすけでは満足まんぞくできず、今いまの苦惱くのうを、いま晴はらしてくださる知識ちしきはないか、論註ろんちゆうには晴はれて満足まんぞくができると書かいてあるではないか、和讃わさんには、

無碍むげ光如来こうにょらいの名号みやうごうと

かの光明智相こうみょうちそうとは

無明長夜むみやうちやうやの闇あんを破はし

衆生しゆじやうの志願しがんをみてたまふ

と書かいてあるではないか。書かいてある以上いじやうは、晴はれて満足まんぞくされた方かたがあるのではないか。ど

うしたら晴れるのだ、どうしたら満足ができるのだと必死になり、いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定住家ぞかし、三千世界のものはみな助かつて、私ひとりは助からないのだと往生の望みが絶えたとき、無間のどん底から生え抜きの悪性を、我能く汝を護らんの仏智の不思議が貫いたとき、無条件の救済とはこのことかと天地に轟く大慶喜、その初起の一念を「歎異鈔」では「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏もうさんとおもいたつ心のおこるとき（聞即信の一念）すなわち（同時に）摂取不捨の利益にあづけしめたまうなり」と仰せられたのであります。

その一念の内容を開いてみせたのが二種深心であります。堕ちるものをお助けと知ったのは合点したのですから、方便の桁にいます。実地に往生の望みが絶えて堕ちたときが、信機であり、それが助かったときが信法であります。そんなことが凡夫にできるものかと思っておらるるのが、方便の桁にいます。真剣に求道しなさい、私が苦抜けしたのです

から、あなたができない筈がありません。たとい法然上人にすかさされまいらせて念仏して地獄に堕ちたりとも、更に後悔すべからず候と大満足を得たのが真実に生かされたのであります。この方便と真実の水際の立たない人は、攝取されていないのですから、方便と真実との区別は、信一念の体験のない人は方便の桁にいる人であり、体験のある人は真実に生かされた桁の人であります。方便を方便と知らないのは、真実に入っていない証拠であります。

『随想録』より

42

真仮の分際

真仮の分際とは、それは弥陀の本願を源とし、三経の上に流れ七祖の上から聖人様まで流れているのだから、信前信後の水際の立たない人にはこの味は判らず、真仮の分際を諦得された人でなければ、報化二土なんて学問としてしか扱えないのだ。真実と方便との区別の

つかぬ人ひとには真実しんじつの信しんは体験たいけんさされていないのだ。

方便ほうべんを知らない人ひとには真実しんじつは判わからず、真実しんじつを知らない人ひとには方便ほうべんは判わからないのだ。道俗どうぞくよ、名号みょうごうを称となえ喜よろこべば皆他力みなたりきの行者ぎようじゃのように思おもつていてはならないぞ。専修せんじゆの行者ぎようじゃのように自惚うぬぼれていてはならないぞ。

弥陀みだの本願ほんがんの上うへに第十八願だいじゅうはちがんは随自意ずいじいの他力たりき、第十九願だいじゅうきゅうがんは随他意ずいたいの自力じりき、第二十願だいじゅうにがんは随他意ずいたいの半自力半他力はんじりきはんたりき。親様おやさまは第十八願だいじゅうはちがんの純他力じゆんたりきで救すくうのが真意しんいであるけれども、衆生しゆじやうは一朝一夕いつちやういつせきでは自力じりきの機執きしゆうが捨すたらないから、第十九願だいじゅうきゅうがんの修諸功德しゆしよくどくの自力じりきの善根ぜんこんを誓ちかい、更に善根ぜんこんの総体そうたいたる第二十願だいじゅうにがんの植諸徳本じきしよとくほんに誘導ゆうどうして本願海ほんがんかいに帰入きにゆうせしめんと、半自力半他力はんじりきはんたりきを説とかれたものであるから、三願転入さんがんてんにゆうは真仮しんけの分際ぶんさいを明瞭めいりやうにしなければ真意しんいは顕あらわれないのだ。真実方便しんじつほうべんを甄別けんべつしなければ、仏智ぶつちは隱蔽おんぺいさるる事ことになるのだ。その結果けつかが報化二土ほうけにどに弁立べんりゆうさるるのだから、三願さんがんの真仮しんけをしらなければ報化二土ほうけにども判わからないのだ。

三願さんがんを開設かいせつされたのが三部經さんぶきょうなのだから釈尊しゃくそんに隱顯おんけんの說せつの有あるのは当然とうぜんなのだ。十九願じゅうがんを觀經かんぎょう、二十願にじゅうがんを小經しょうきょう、十八願はちじゅうがんを大經だいきょうに演說えんぜつして、自力じりきより半自力はんじりきはんたりき半他力また、又それより純他力じゆんたりきまで誘引ゆういんし、大經だいきょうに胎化段たいけだんを顯あらわして十九願じゅうがんを以い疑惑心ぎわくしん修諸功德しゆしよくどく、二十願にじゅうがんを疑惑不信ぎわくふしん然猶信罪ねんゆいしんざい福修ふくしゅう習善本じゅうぜんほんと、二願にがんには疑惑ぎわくの二文字にもじを冠かむらして胎生たいしやうの厄やくを免まぬれずとし、十八願はちじゅうがんは明信みやうしん信智ちと說といて化生けしやうの益やくを獲うると 明あきらかに報化ほうけ二土にどを区別くべつしておらるるのだ。

南天なんてんは易行品いぎやうほんに「若もし人善根ひとぜんこんを種うえて疑うたがえば則すなわち華開はなひらけず 信心清淨しんじんしやうじやうなれば華開はなひらいて仏ぶつを見みたてまつる」と仰おおせられてあるが、若もし人ひととは十方衆生じつぱうしゆじやう、種善根しゆぜんこんとは十九願じゅうがんの人ひとは修しゆ諸功德しよくどく、二十願にじゅうがんの人ひとは植諸徳本じきしよくとくほん、十八願はちじゅうがんの人ひとは乃至十念ないしじゆねんと見るのだ。前二者ぜんにしやは疑うたがえば華開はなひらけず、後者こうしやは華開はなひらいて仏ぶつを見奉みたてまつるだから、原因げんいんが違ちがうから結果けつかが違ちがつてくるのだ。

北天ほくてんの普共諸衆生ふぐしよしゆじやうを雁門がんもんは下々品げげほんと判はんじ、一方いつぱうには称名破滿しやうみやうはまんを顯あらわし、又一方またいつぱうには称名憶しやうみやうおく念ねんすれども無明むみやう由在ゆざいし志願しがん不ふ満まんの人ひとがいる、それは三不信さんぷしんによるからだと如実にょじつ不如実ふにょじつの

修行しゆぎようを明瞭めいりように判別はんべつされたのは、三不信さんぶしんより三信さんしんに基もとづかしめんが為ためであり、真実方便しんじつほうべんの水際みずぎわは判然はつきりしているのだ。

西河さいがは念仏ねんぶつに始終しじゆうの両益りょうやくを顕あらわして諸行しよぎようを排除はいじよし、念仏ねんぶつを勧めすすめられたのは方便ほうべんの諸行しよぎように停滯ていたいせず真実しんじつの名号みようごうに帰きせしめんが為ためである。

終南しゆうなんは、往生礼讃おうじようらいさんに専雜せんざうの得失とくしつを判じ、横川よかわは、これを受けて報化ほうけの二土にどを弁立べんりゆうし、

吉水よしみずは、和語灯わごとうに「念仏ねんぶつには独ひとり立ちをせさせて助けささぬなり、助けさす程ほどの人は極樂ごくらくの

辺地へんちに生まうる」等などと化土けどの事ことを顕あらわし、祖師そしは、明あきらかに御本典ごほんでんに三願さんがんを配当はいとうして、真実しんじつの

教行信証きやうぎやうしんしやうの次つぎに、化身土けしんどの卷まきを出だされたのは、機執きしゆうを募つのる十九、二十の願人がんにんを結果けっかの上うえか

ら捨てすしめんが為ための教示きやうじではなかつたか。

道俗どうぞくよ、以上いじようの如ごとく源みなもとは本願ほんがんに発はつし、流れは太谷おおたにに及およんでいるのに、何故なぜ方便ほうべんを知らしない

のだ。方便ほうべんを知らなければ猶更なおよさら眞実しんじつは判わからないのだ。

両方りょうほうを比較ひかくしてこそ、長短方円ちやうたんほうえん輕重けいちやうしんけ眞仮しんかは判わかるのではないか。

第十八願だいじゅうはちがんしかいらないと頑張がんばる人もいるが、十八願じゅうはちがんしか必要ひつようがないのなら、弥陀みだの本願ほんがんに何を好このんで三願さんがんを開設かいせつされよう。何を煩わづらわしく釈尊しゃくそんも三經さんきやうを開設かいせつせられよう。十八願じゅうはちがんしかいら
ないと言いう人は謗法ぼうぼうの重罪じゆうざいを侵おかしているのだぞ。

教おしえる人も聞きく人も、唯ただじや唯ただじやと有頂天うちやうてんに成なっているが、何故なぜ唯ただになる迄までも求めないの
だ。他力たうりきが無む力りきになつていやせぬか。その儘ままがやりつ放はなしになつていやせぬか。底そこぬけの
悪性あくしやうが宇宙うちゆうの主ぬしにさしていただくのだもの、眞劍しんけんに求めさされなくて鮮あざやかに開発かいほつ出来るも
のかい。